

長崎県農林技術開発センター



センターニュース

巻頭言

..... -1-

- 「イチゴ、中晩柑」新しい品種育成への挑戦
- 表紙の写真

研究成果

..... -2-

- イチゴ「ゆめのか」の暗黒低温処理と夜冷短日処理の効果的な処理開始時期
- クエン酸施用によるアスパラガスの生育促進効果
- ドリフト低減ノズルを利用したアスパラガスの効果的な防除法
- 微粒子の炭酸カルシウム水和剤散布による「せとか」の日焼け果の軽減
- 黒毛和種去勢牛の不飽和脂肪酸割合を向上させる脂肪酸カルシウム給与技術
- 肥育後期豚の暑熱ストレスを緩和する給与飼料の高エネルギー化、高リジン化
- 長崎県における松くい虫の発生消長

研究紹介

..... -10-

- 県産農産物の機能性成分等を評価し販売促進を進めるプロジェクト
- アシストスーツの実証による「長崎型スマート農業」の実現

研究機関の取組

..... -11-

- 中国福建省林業科学研究院訪日団との農林業科学技術交流
- 中学校職場体験学習・高校生インターンシップの受け入れ

お知らせ

..... -12-

- 平成27年度研究功労者表彰を受賞
- 諫早湾干拓地における春の収穫体験
- 組織改正

巻頭言



農林技術開発センター
所長

嶋 純 秀

表紙の
写真

○「イチゴ、中晩柑」新しい品種育成への挑戦

農林技術開発センターでは、長崎県の農林業の振興を図る様々な技術を開発してきました。とりわけ、いつの時代も消費者や実需者、生産者が望む新しい品種を開発し、提供することは、研究的責務だと考えています。これまでに、当センターでは、バレイショやビワ、カーネーションをはじめ、近年では、温州みかんやちゃんぽん麺に向く小麦などの新品種も育成してきました。特にバレイショ「ニシユタカ」は、それまでの主力品種である「デジマ」に比べ単収が1割程度多いこともあり、急速に産地化が進み、現在最も栽培されている品種となっています。この増収分を金額に換算すると、毎年10億円の経済効果ということになります。また、ビワの「長崎早生」が育成されると、それを利用したビワのハウス栽培が行われるようになり、早期出荷による所得の向上と露地ビワを組み合わせた経営の安定が図られるようになりました。このように、新品種は本県農業振興の原動力として大きな役割を果たしてきました。

このような中、本年度から、イチゴと中晩柑について、新たに育種に着手することとしました。イチゴは、主要各県で育種に取り組まれており、福岡県の「あまおう」、栃木県の「とちおとめ」などが有名です。イチゴの育種には最低10年はかかると考えていますが、市場や消費者の皆様には選ばれたいものを目指して育種目標を定め、既存品種を大きく超える品質の育成に取り組めます。一方、中晩柑については、近年、影響が心配されている地球温暖化を考慮しつつ、県内に中晩柑の新しい産地を育成できる品種の開発を目指します。イチゴ、中晩柑の育種には新たに担当者を1名配置するなど体制を強化するとともに、粒粒辛苦として新品種の育成に取り組んでいきますので、ご期待ください。

○お茶の事始め

長崎県は日本にお茶が伝来した県です。その歴史は、遣唐使の時代にまで遡り、中国の禅僧・栄西が平戸に禅と茶を持ち帰ったことから栽培が始まり、全国に普及したと言われています。長崎県内には、そのぎ茶の他、世知原茶、雲仙茶、五島茶などがあり、全国11位の生産量（生葉収穫量、H26年度農林水産統計）となっています。

県内産地の中でも、東彼杵町は長崎一のお茶の産地であり、農林技術開発センター茶業研究室は、約2.7ヘクタールの試験用茶園と、1時間に生葉約240kgを処理・加工できる製茶工場を備え、長崎県で生産する地域特産茶種「蒸し製玉緑茶」の高品質安定生産に向け、環境保全型や省力化の栽培法、品種比較、加工技術改善の試験を行っています。

近年、お茶については、全国的に消費量が落ち込み、単価も下がっている中、県では県産品愛用推進指定店（県産茶取り扱い店舗）を設置し、PR活動を実施しています。さらに、農林技術開発センターでは、茶の機能性にも注目し、茶に含まれるカテキンや、ビワの葉、カンキツの果実を混合発酵することで発現する機能性の開発にも取り組んでいます。



栄西禅師石碑
(平戸市)

イチゴ「ゆめのか」の暗黒低温処理と夜冷短日処理の効果的な処理開始時期

● 背景・ねらい

愛知県で育成された「ゆめのか」は、大果で収量性が高く、輸送性にも優れることから本県におけるイチゴの主力品種として期待される品種です。しかし、「ゆめのか」は「さちのか」以上に頂花房の花芽分化が遅い傾向にあり、クリスマス需要期に高単価で取引される年内収量を確保するには安定して花芽分化を促進させる技術が必要となります。

そこで、「ゆめのか」に対する暗黒低温処理(株冷)と夜冷短日処理(夜冷)の効果的な処理開始時期について検討しました。

農産園芸研究部門 野菜研究室



主任研究員 前田 衡

■ 「ゆめのか」の早進処理による定植・出蕾・収穫開始日及び年内収量(2014年)

処 理	処理開始日	定植日	出蕾日	開花日	収穫開始日	年内収量
暗黒低温処理 (株冷)	8月5日	9月1日	11月1日±9日	11月17日±10日	12月28日±12日	32kg/a
	8月12日	9月1日	10月12日±8日	10月26日±9日	11月30日±13日	76kg/a
	8月19日	9月11日	10月13日±6日	10月26日±6日	11月23日±7日	85kg/a
	8月26日	9月10日	10月11日±3日	10月23日±4日	11月23日±6日	106kg/a
	9月2日	9月13日	10月13日±2日	10月26日±2日	11月27日±4日	87kg/a
	9月9日	9月17日	10月17日±2日	10月28日±1日	12月4日 ±2日	71kg/a
夜冷短日処理 (夜冷)	8月5日	9月1日	9月28日±2日	10月9日 ±2日	11月7日 ±3日	166kg/a
	8月12日	9月1日	10月3日±2日	10月14日±1日	11月13日±2日	150kg/a
	8月19日	9月5日	10月7日±5日	10月19日±5日	11月16日±2日	149kg/a
	8月26日	9月7日	10月8日±1日	10月21日±1日	11月22日±4日	133kg/a
	9月2日	9月15日	10月14日±1日	10月27日±1日	12月1日 ±3日	90kg/a
	9月9日	9月17日	10月17日±1日	10月31日±1日	12月10日±3日	64kg/a
無処理	—	9月16日	10月16日±1日	10月30日±1日	12月7日 ±3日	72kg/a

● 研究成果

暗黒低温処理では8月26日からの処理開始で最も安定した早進効果があり、年内収量が増加しました。それより早い時期の処理は出蕾、開花、収穫開始期にばらつきが生じ、効果が不安定となり、遅い時期では早進効果が劣りました。

夜冷短日処理では処理開始時期が早いほど、無処理に比べ定植日及び収穫開始日が早まり、特に8月26日以前の処理開始で早進効果が高く、年内収量が大幅に向上することが明らかになりました。

暗黒低温処理は比較的低コストで処理ができるため、「ゆめのか」の主要な作型として普及しています。なお、夜冷短日処理は、専用の処理施設が必要となります。



クエン酸施用によるアスパラガスの生育促進効果

● 背景・ねらい

環境研究部門 土壌肥料研究室

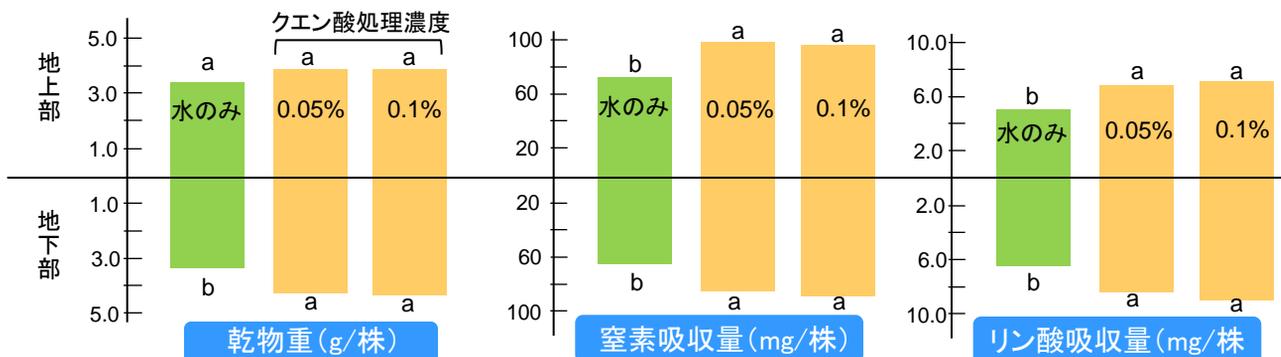
アスパラガスの地下部重は地上部重と正の相関があります。また、地上部の生育量が大きいほど翌年の春芽収量が多くなります。これまでクエン酸施用により、キャベツ苗の生育促進やミカンの細根増加が報告されています。アスパラガス栽培でも発根促進を目的に、クエン酸資材が土壌改良資材として販売利用されていますが、具体的なデータはありませんでした。



室長 井上勝広

そこで、クエン酸水溶液(0.05%および0.1%)、並びに現地でよく使用されている代表的なクエン酸の民間資材2種類(A, B資材)を供試し、その効果を検証しました。

■ クエン酸処理とアスパラガスの生育、窒素吸収量



※平成25年4月12日定植。6月17日掘り取り。生育期間は66日間。処理日は5月9日～6月13日に全11回かん水処理部位別の異符号間には、Tuckeyの多重検定により5%水準で有意差あり(n=10)

■ クエン酸資材とアスパラガスの生育

試験区	無処理	クエン酸資材A	クエン酸資材B
地上部乾物重	2.8g/株	2.9g/株	3.1g/株
地下部乾物重	2.7g/株	3.7g/株	3.9g/株

※7日ごとに計8回クエン酸資材500倍液を1Lずつ施用し、無処理区は水のみ1L施用
5月2日定植。6月27日掘り取り。生育期間は56日間。



アスパラガスの地下部

● 研究成果

クエン酸処理により地下部重、地上部重とも増加しました。また、乾物重の増加に伴って養分含有量も増加しました。さらに、クエン酸の濃度が高いほど窒素、リン酸などの無機成分の吸収量が多くなりました。

また、クエン酸を約25%含有するクエン酸資材を500倍に希釈して施用することにより、地上部重、地下部重、地下部の乾物率が増加傾向にありました。

なお、クエン酸資材は強酸性資材のため目や傷口などに触れないように、取り扱いには細心の注意が必要です。また、アルカリ性薬剤との混用はできません。



ドリフト低減ノズルを利用したアスパラガスの効果的な防除法

● 背景・ねらい

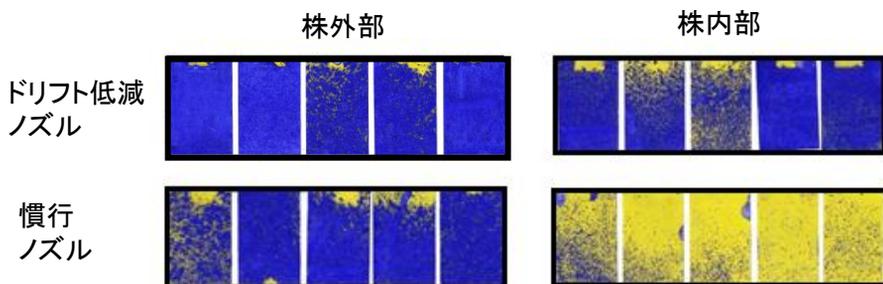
アスパラガスは7月以降に茎葉が繁茂するため、その時期の薬剤散布は薬液が内部まで十分に到達せず、防除効果が上がりにくい問題があります。そこで着目したのが「ドリフト(飛散)低減ノズル」です。このノズルは慣行ノズルと比較して、出てくる薬液の粒が大きいいため遠くまで飛びにくい性質がある一方で、アスパラガスに使用した場合、勢いのある大きな粒が擬葉にぶつかり、弾け飛ぶことによって株の内部まで薬液が付着することが期待されます。今回の試験では、近年、難防除害虫として問題となっているタバコナジラミについて防除効果を検討しました。

環境研究部門 病害虫研究室



主任研究員 陣野泰明

■ アスパラガスでの薬液の到達状況

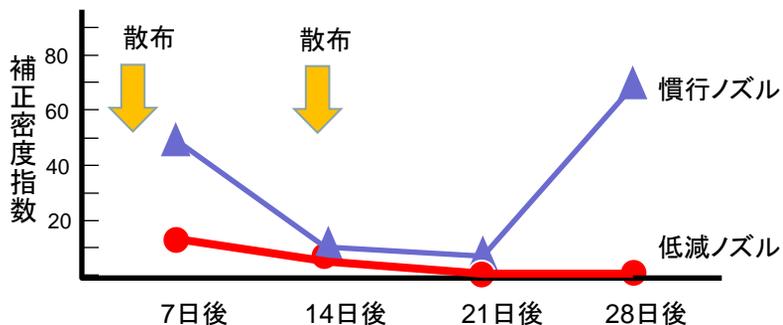


※青色が薬液が付着した部分で、ドリフト低減ノズルを使用すると株内部まで薬液が到達する。



茎葉が繁茂したアスパラガス

■ タバコナジラミの防除効果(スタークル顆粒水溶剤を使用)



ノズル名	噴霧形状 (イメージ図)	平均粒子径
低減ノズル	散布角度 60°	450 μ m
慣行ノズル	散布角度 100°	40 μ m

● 研究成果

アスパラガスの薬剤散布にドリフト低減ノズルを使用すると、粒が大きい薬液が擬葉にぶつかることで株内部まで到達することが確認できました。茎葉が繁茂する夏場に防除が難しいタバコナジラミにも防除効果が高く、発生を抑えることができます。今後は他の病害虫での効果の検証を行います。



微粒子の炭酸カルシウム水和剤散布による「せとか」の日焼け果の軽減

● 背景・ねらい

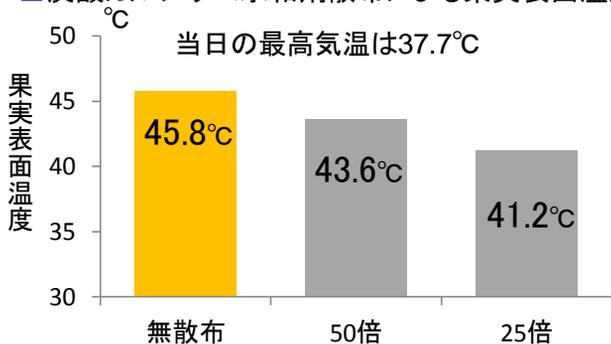
果樹・茶研究部門 カンキツ研究室

気候温暖化が進む中で、果実肥大期のカンキツにおいては夏期の強日射による果皮の日焼け果発生が問題となっています。なかでも中晩生カンキツ「せとか」は、果面が滑らかなことなどから他のカンキツに比べ日焼けの発生が著しい品種です。そこで、カンキツのチャノキイロアザミウマに対して希釈倍率25倍～50倍で登録されているホホワイトコートの副次的な作用に着目し、光反射が大きい微粒子化された炭酸カルシウム水和剤の果実の被膜が、日焼け果の発生に与える影響を検討しました。



室長 古川 忠

■ 炭酸カルシウム水和剤散布による果実表面温度の変化



日焼け果

■ 炭酸カルシウム水和剤散布による「せとか」の収穫時の日焼け果軽減効果

処 理	果実重	着色		果実障害 (発生度)			果実の汚れ (発生度)	糖度
		カラーチャート	a値	日焼け	退色	キズ		
炭酸カルシウム25倍	232g	9.6	34.1	8.3	23.3	6.3	61.7	12.5
炭酸カルシウム50倍	222g	9.4	33.9	18.3	28.3	17.5	36.7	12.6
無 散 布	212g	9.7	34.6	43.3	48.3	18.8	0.0	12.7

※ 発生度: 発生程度を無、軽、中、甚に区分して算出。数字が大きいほど発生度合いが大きい。

※ 散布日: 2013. 8.9および9.10で2回散布 分析日は、2014. 2.5

● 研究成果

微粒子炭カル水和剤の散布により、晴天時の日中には果実温度の上昇を2～4°C抑えることができます。また、散布濃度が高いほど、日焼け果の発生率および発生度は小さくなります。散布回数は、1回より2回散布において日焼け果軽減効果が高く、果実の退色や傷果の発生についても抑制される傾向があります。また、微粒子炭カル水和剤の散布による、糖度・酸含量など果実品質への影響はありません。果実の汚れは、収穫時まで残りますが、濃い濃度ほどその程度は高く、付着した汚れを出荷前に丁寧に拭き取る必要があります。本剤の登録は「カンキツ」の「チャノキイロアザミウマ」のみであり、日焼け果の防止はあくまで本剤の副次的な作用です。今後登録に向けて検討します。



黒毛和種去勢牛の不飽和脂肪酸割合を向上させる脂肪酸カルシウム給与技術

● 背景・ねらい

畜産研究部門 大家畜研究室

「長崎和牛」ブランド強化のためには、枝肉重量や脂肪交雑だけでなく、おいしい牛肉を安定的に提供できる本県独自の飼養管理技術が必要です。これまでに、米ぬかおよび米胚芽油由来の脂肪酸カルシウムを混合した濃厚飼料を出荷前12カ月間、黒毛和種去勢牛に給与した結果、飼料摂取量および肉質等に影響を及ぼさず、その牛肉は60%以上の不飽和脂肪酸を有し、脂肪融点が低く、風味が良い評価を得ることを明らかにしました。しかし、脂肪酸カルシウムの給与コスト低減に向けた給与期間の短縮が、食味性を高めることができるかは解明されていません。そこで、給与期間が黒毛和種去勢肥育牛の肉質および牛肉の脂肪酸組成に与える影響を検討しました。



主任研究員 橋元大介

■ 飼料給与体系

試験区	月 齢																						
	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28			
12カ月区	肥育前期					肥育後期			脂肪酸カルシウム給与														
9カ月区						肥育後期						脂肪酸カルシウム給与											
6カ月区						肥育後期									脂肪酸カルシウム給与								

■ 脂肪酸カルシウム添加飼料給与期間と黒毛和種去勢牛の飼料摂取量、枝肉格付成績、粗脂肪、脂肪酸組成

試験区	飼料摂取量	枝肉重量	胸最長筋面積	皮下脂肪厚	BMS No.	粗脂肪	飽和脂肪酸	不飽和脂肪酸
12カ月区	5097kg/頭	516.7kg ^a	63.5cm ²	2.8cm ^a	6.8	45.5%	37.6%	62.4%
9カ月区	5701kg/頭	597.6kg ^b	73.3cm ²	4.0cm ^b	8.8	51.4%	39.1%	60.9%
6カ月区	5254kg/頭	555.8kg ^{ab}	69.0cm ²	3.5cm ^{ab}	8.5	50.4%	38.4%	61.6%
有意性	差なし	あり	差なし	あり	差なし	差なし	差なし	差なし

● 研究成果

肥育後期の脂肪酸カルシウム添加期間を、12月から6か月に短縮しても、黒毛和種去勢牛の飼料摂取量、胸最長筋面積およびBMS No.に影響を及ぼしませんでした。また、牛肉中の脂肪酸組成割合にも影響を及ぼさず、不飽和脂肪酸割合は牛肉の風味に関する評価を高くすると言われる60%以上でした。

なお、脂肪酸カルシウムの給与時には以下の点に留意して利用してください。

- ①米胚芽油由来等の高い不飽和脂肪酸割合を有するものを利用する
- ②肥育牛濃厚飼料中の脂肪含量は5%を上限にする
- ③摂取量のばらつきをなくすため、配合飼料と攪拌し給与する



肥育後期豚の暑熱ストレスを緩和する給与飼料の高エネルギー化、高リジン化

● 背景・ねらい

畜産研究部門 中小家畜・環境研究室

暑熱期における肥育豚の生産性の低下には、高温ストレスによる飼料摂取量と摂取した飼料の消化率の低下が大きく関与しています。このため、暑熱による飼料摂取量の低下分を加味した飼料栄養水準や豚の消化性を考慮した飼料原料の検討が生産性の改善に向けては重要と考えられます。そこで、常時30℃に設定した高温環境下の肥育後期豚に対し、植物性油脂および単体アミノ酸を用いて標準的な栄養価を持つ肥育飼料よりもエネルギーおよび必須アミノ酸であるリジン含量を高めた飼料を給与した際の採食性、消化性および血液性状について比較し、暑熱期に適した飼料設計の方向性を見出すことを本研究のねらいとしました。



主任研究員 本多昭幸

■ 高温環境下(30℃)での肥育後期豚に対する高エネルギーおよび高リジン飼料の影響

		標準エネルギー		高エネルギー	
		標準リジン	高リジン	標準リジン	高リジン
飼料摂取量	現物摂取量	1714g/日	1781g/日	2091g/日	1853g/日
	TDN摂取量	1303g/日	1354g/日	1672g/日	1482g/日
	リジン摂取量	11.1g/日	14.6g/日	14.0g/日	14.8g/日
	1日平均増体量	327g/日	480g/日	627g/日	480g/日
消化率	乾物	86.4%	86.7%	86.5%	85.4%
	粗蛋白質	83.9%	85.1%	86.1%	83.5%
	粗脂肪	69.3%	66.8%	72.2%	71.6%
血漿生化学性	総蛋白	6.9g/dL	6.6g/dL	6.8g/dL	6.8g/dL
	グルコース	87mg/dL	95mg/dL	102mg/dL	100mg/dL
	GOT	36IU/L	16IU/L	19IU/L	11IU/L
	GGT	160IU/L	71IU/L	75IU/L	56IU/L

標準エネルギー
(可消化養分総量)⇒76.3%
高エネルギー⇒80.0%
標準リジン⇒0.65%
高リジン⇒0.8%



肥育豚の消化試験の様子

● 研究成果

高温環境下での肥育後期豚への高エネルギー化した飼料の給与は、飼料摂取量およびTDN摂取量の増加に、高リジン化した飼料はリジン摂取量の増加に寄与しました。また、高エネルギー飼料ではリジン摂取量も増加し、増体量でも改善が認められましたが、飼料の消化率に影響は認められませんでした。また、血漿生化学性状でみる栄養指標に大きな影響を認められましたが、肝機能の指標となるGOT、GGT値が標準飼料と比較して低くなりました。

以上のことから、標準的な栄養価の肥育飼料に対してエネルギーまたはリジン含量を高めた飼料の給与は、消化率に影響することなく、高温環境下における肥育後期豚のエネルギーおよびリジン摂取量の増加と肝機能の維持に貢献することが明らかとなりました。



長崎県における松くい虫の発生消長

● 背景・ねらい

マツ林に甚大な被害をもたらす松くい虫被害は、「マツノザイセンチュウ」という体長1mmに満たない線虫がマツの樹体内に入ることによって引き起こされます。その線虫をマツからマツへ運ぶのが「マツノマダラカミキリ」というカミキリ虫です。被害対策として薬剤の予防散布がありますが、マツノマダラカミキリが羽化脱出する期間に合わせて実施しなければ高い効果が望めません。そのため、センターでは野外網室に枯れたマツの丸太を設置し、そこから発生したマツノマダラカミキリの調査を30年間継続して行ってきました。

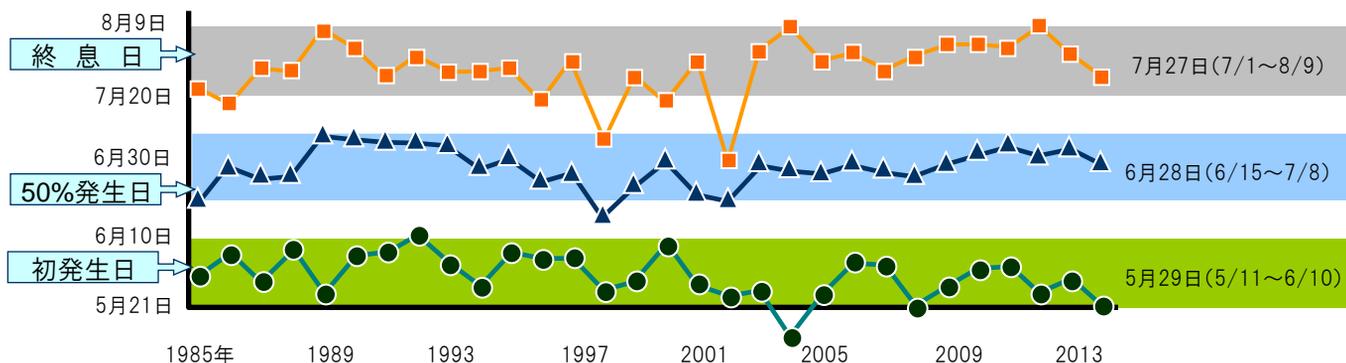
森林研究部門



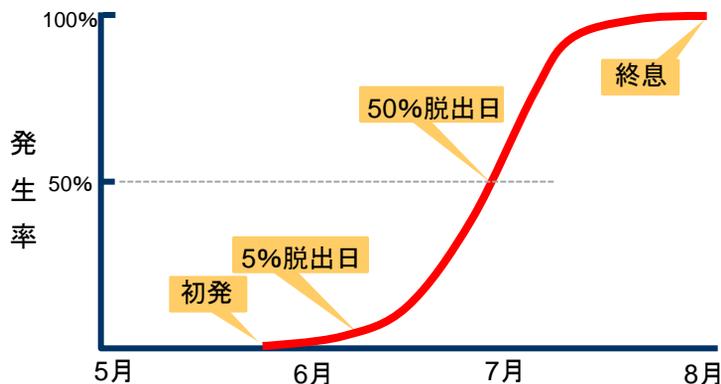
研究員 深堀 惇太朗

■ マツノマダラカミキリ羽化脱出時期推移(諫早市1985～2014)

昭和60年～平成26年の平均(範囲)



■ マツノマダラカミキリ発生曲線(累積)



マツノマダラカミキリ

● 研究成果

調査の結果、マツノマダラカミキリの発生期間は5月下旬から8月上旬であり、初発日は5月下旬～6月上旬、羽化が最盛期になる50%脱出日が6月下旬～7月上旬、羽化脱出の終息日は7月下旬～8月上旬でした。薬剤散布の時期はカミキリが発生し始めてから2週間後が適期とされているため、6月上旬が散布適期であることが明らかになりました。松くい虫被害を軽減させるためには最適の時期、方法で防除を実施し、また被害が発生した場合には、徹底した駆除が必要になります。発生予察による予防だけでは被害対策は十分とはいえ、予防と駆除の徹底が、被害を最小限に抑えるために重要となります。



県産農産物の機能性成分等进行评估し販売促進を進めるプロジェクトを始めました

※戦略プロジェクト研究「おいしい・機能性成分高含有」県産農産物の探索、育成、販売プロジェクト」として実施します。

● 背景・ねらい

長崎県の農業産出額は全国の減少傾向の中、着実に増加しています。一方、販売単価については、必ずしも全国上位とは言えず、所得向上のためには消費者に選ばれる農産物の生産とブランド化を進め、販売単価を向上することが必要となっています。一方、国は機能性を審査する特定保健用食品(トクホ)に加え、本年4月から生産側(企業や産地など)の研究成果をもとに届出することで、機能性を表示できる新たな制度をスタートさせました。そこで、県内農産物の中でこだわりがある品目の機能性成分や味覚等の特徴をデータベース化するとともに、簡易測定方法や販売方法を開発し、本県産農産物のブランド化を効果的に推進する研究に着手しました。

1 県産農産物の味覚・機能性成分データベース

本県農産物を関係機関や産地等と連携して選定し、品種や栽培方法、作型等による味や機能性成分含有量の違いを明確化し、他県産と比べ優位性を持ち、消費者に訴求できる農産物のデータベースを構築します。

作物	品種(例)	栽培、作型	味覚の特徴	抗酸化力
いちご	さちのか、ゆめのか	高設、地床	糖度等	ORAC等
みかん	岩崎、原口、させぼ	マルチ、露地		
ばれいしょ	ニシユタカ、さんじゅう丸	有機栽培		
……				

2 生体・光センシングによる味覚・機能性成分測定技術

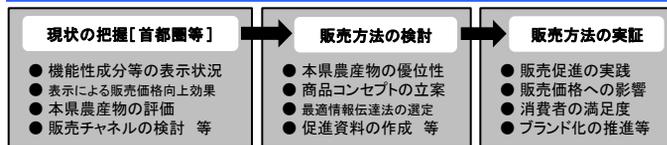
牛肉の格付けや美味しさのもととなる「脂肪交雑」や「オレイン酸」、みかんなどに含まれ、抗酸化機能を有する「βクリプトキサンチン」を簡易に測定する技術を開発します。測定結果は栽培・飼養管理や実需者、消費者に提供し、「長崎和牛」や「長崎みかん」の販売促進に活用します。



3 味覚・機能性成分等を利用した販売促進技術

県産農産物の特徴や機能性成分の表示を積極的に活用する効果的なマーケティングを行い、小売の現場で消費者に訴求できる新しい販売促進技術の開発を図ります。

選定した農産物をケーススタディとして販売促進技術を実証しマニュアル化



アシストスーツの実証による「長崎型スマート農業」の実現

● 背景・ねらい

離島・半島を多く抱える長崎県では、急傾斜地でも労働集約型の園芸作物が生産されています。しかし、高齢化や後継者不足等により「きつい」「きけん」な作業が敬遠されています。そこで、農林水産省事業の農林水産業におけるロボット技術導入実証事業を活用し、東京理科大学が開発した「圧縮空気」を動力とし、「人工筋肉」を利用した「パワーアシストスーツ」の実証に取り組み始めました。

実証の中で、軽労化・省力効果や製品の改善点等を調査し、それぞれの機械に適した品目や作業を明らかにすることで「長崎型スマート農業」の実現による「稼ぐ力」の強化を図ります。



東京理科大学開発のパワーアシストスーツ

中国福建省林業科学研究院訪日団との農林業科学技術交流

平成27年4月7日から10日にかけて、中国福建省林業庁から農林業科学技術交流として、林業庁副巡視員「張欣欣(Zhang Xin Xin)」氏、林業種苗総ステーション長「林彬(Lin Bin)」氏、林業科学研究院長「李建民(Li Jian Min)」氏、林業基金管理総ステーション「黄春鶯(Huang Chu Ying)」氏が長崎県を訪れました。一行は長崎県農林技術開発センター森林研究部門で取り組んでいるツバキの育成研究や人工衛星画像による植生変化の把握について質疑を交わした後、雲仙・普賢岳噴火災害後の治山事業や植林地、菌床シイタケ生産者施設、海岸防災林、苗木生産者施設、木材生産事業体作業現場の視察と意見交換を行いました。

交流最終日には、長崎県庁で加藤農林部長を表敬訪問し、各訪問先の先端技術に触れられたことや関係者の熱意ある取り組みに感心し、また心のこもったおもてなしを受けたことに感謝の言葉を述べられました。

今後は、ツバキに関する研究技術交流を深めたいこと、視察した治山技術、松くい虫防除技術や良質な苗木生産技術を中国でも広めたいことを農林部長に伝えました。

さらに、日本の林業技術は環境保全を重視していることに感銘し、自分たちもその姿勢を学びたい。と述べられました。

今後も長崎県と福建省との農林科学技術交流が相互の農林業の発展と両者の交友関係に大きな役割を果たしていくものと思われまます。



海岸防災林の視察



木材生産事業体作業現場の視察、意見交換



菌床シイタケ生産者施設の視察、意見交換

中学校職場体験学習・高校生インターンシップの受け入れ

農林技術開発センターでは、諫早市内の公立中学校・高等学校の職場体験学習およびインターンシップの受け入れを実施しています。平成27年度は諫早市立西諫早中学校、北諫早中学校の職場体験学習の受け入れを実施しました。今後の予定として、県立諫早高校付属諫早中学校、県立諫早農業高校、県立佐世保工業高等専門学校の受け入れを予定しています。

中学生の総合授業の一環として実施されている職場体験学習では、農林技術センターの各研究部門・室の取り組み紹介・体験学習を実施しました。中学生たちは熱心に研究員の話聞き、わからない点は質問していました。有意義な体験となったようです。



マツノマダラカミキリの発生数調査
西諫早中学校職場体験学習(6月24日)

受 賞

平成27年度研究功労者表彰を受賞

当センター馬鈴薯研究室の中尾 敬 室長が全国農業試験研究場所長会が主催する研究功労者表彰を受賞しました。この受賞は、「暖地向けバレイシヨの病害虫抵抗性育種システムの確立」が評価されたものです。



暖地バレイシヨ生産ではジャガイモシストセンチュウ、そうか病、青枯病、ウイルス病や疫病などの重要病害虫が課題となります。DNAマーカーを用いた抵抗性検定技術であるマルチプレックスPCR法や、新たな抵抗性を導入するチューバーディスク培養法などの新技術を開発・活用し、病害虫複合抵抗性品種を効率よく育成・選抜できる育種システムを確立しました。

諫早湾干拓地における春の収穫体験

5月30日(土)に農林技術開発センター干拓営農研究部門試験圃場で学童を対象にした春の収穫体験を行いました。参加した諫早市、長崎市、大村市の計9学童クラブ、272人の子供たちは小雨が降り続く中で収穫を体験しました。

子供たちは雨にも負けずに干拓の作物に接し、元気な歓声を上げていました。今年、豊作だった馬鈴薯とタマネギの収穫体験でしたが、途中から雨脚が強くなり、子供たちが満足するだけのたくさんの量を収穫することができずに残念がっていました。



当センターの組織が一部改編されました

これまで農産園芸研究部門であった茶業研究室が果樹部門と統合して果樹・茶研究部門の研究室として新たに発足しました。同じ永年性作物として共通する研究分野も多く、これまでも茶葉とビワ葉を混合発酵したワンダーリーフの商品化や摘果みかんを利用した発酵茶の製造技術など共同研究を行ってきました。今後のさらなる連携強化が期待されます。

●平成27年4月より

果樹・茶研究部門

研究調整室

カンキツ研究室

ビワ・落葉果樹研究室

茶業研究室

発行  長崎県農林技術開発センター

〒854-0063 長崎県諫早市貝津町3118番地 TEL 0957-26-3330

<https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/>